

昭和二十四年七月二十三日
發行第三(種郵便物認可)
每月一回・十五日發行

(通第三〇七号)

慈光

第二十七卷

第一号

予が宗教的実験……………	近角常観……………	(1)
念仏——おもいでの記事……………	白井成允……………	(8)

求道の中心……………	福島政雄……………	(10)
高原憲先生聞書……………	平岡坦……………	(14)

念仏詩抄……………	木村無相……………	(16)
忘れ得ぬ人々……………	花田正夫……………	(19)

慈子が宗教的実験

近角常観

つい近頃のこのように記憶しているが、誰であったか私に向って「君の信仰は誰より継承したか」と尋ねられたことがあった。そう尋ねられて見るとすぐに答えが出来る。有体に白状すれば沢山先輩より教えを受けて、大なる感化を蒙っている恩師も多けれど、自分の信仰の中心たる部分は、誰より授かったと言うことは言い難い。強いて言えば、仏より授かった、そして、その信仰の定まったのは苦悶した時じゃと答えた。

つい先達の事（明治三十七年）であったが、この度いよいよ父と別れるという時になって、初めて自分の信仰は全く父より継承していたことに気がついた。苦悶時代を始めとして色々の宗教的経験をしたが、かくの如き困難の時に、蔭にいて非常な念力を以てこれを守ってくれた人は親であったことに気がついた。なお一歩深く考えるに、このとき経験をなすべき性質それ自身が親よりの遺伝であった。これを養って下さったのも又親たることに気がついた。日出でては耕し、日入りて憩う。井を掘って飲み、自

ない。昨年の秋頃この道を通して、云うに云われぬ感慨を起した。かくどうでもよいことには、親がどれ程苦勞しても云うことを聴いて下さった。それがために物事に坐折せず、意志を固くするように養われた。

かく私は物事に固執するにもかかわらず、頗る内弁慶で人の中でも人の言うことに従う風であった。実は従うのではない。心中すこぶる不満なけれど、なお適切に言えば、他が悪いと思っても、これに抗議することの出来ぬ風であった。一時は負けるは勝つのはじゃと考え、盲従をもって謙讓の如くごじつけ、道徳を行ったかの如く自ら慰めていた。然るに、あるとき母が新たに織って下さった衣服を着て遊んでおったが、勿論過ちであったが、他の子供さんさんさんに泥を沢山つけられて帰って来たら、いつもやさしい父親が決して承知されぬ。他人に泥をぬられておめ帰ってくる腰抜けがあるものか、是非とも泥をつけた奴に洗わして来いと、叱って決して家に入れて呉れられぬ。

その時ほどほど自分の意気地なしにあきれて、父親の大打撃によって、体面を保つことと謙讓とは大いに区別すべきことを悟った。むしろ正しき事のためには、如何に苦しくてもこれを主張せねばならぬという考えが養われた。本来私は臆病であったのであるから、他に泥をつけられても、これを洗って返せと抗言するよりは、泣く泣くでも自分の

ら耕して食う。帝力何ぞ我にあらんやと。いつかど自分でもやったつもりで、帝王の存在に気がつかんのは、堯帝の徳化があまり大きいからである。わが信仰の如きは実にその趣がある。自分が実験したと考えているが、首を廻らせば、その実験が皆親のたまもので出来ているのであった、思えば実に広大なことである。

私は全体子供の時より物事を思いつくと言ひ張ってきかぬという性があったため、親にどれ程心配をかけたかわからぬ。たしか七八才の時、京都の病院へ連れられて行った時、診察が終って、他の同行者がその日に大津に帰ると云うたら、私も帰りたいと言ってきかぬ、泣き出してきかぬ。それがため父は日暮れより大きな子供を負って、渋谷越えを暗夜に三里手さぐりをして越えられた。その同行者が皆婦人である上に、その時分には随分強盗追刺などが出るといううわさがあった、すこぶる気味が悪かったと一代話された。暗い小路から山科街道の明るい所へ出た時は、子供心になお覚えがあるぐらいなれば、物凄かったに違いない。

不利益に甘んじてる方が、どれ程自分の気に叶ったかしれぬ。されどこの活きた教訓によって、従来性質になかった物が出来た様に、今に感じている次第である。

我を育てるために、又我に学問させるために、非常な苦勞されたことはおびただしけれど、それは略して信仰のことだけにしよう。信仰といえは、前にも有体に書いて置いた通り、父はしきりに法を喜ばれ、随分遠方まで求めに行かれたことを記憶する。殊に門徒を感化し、夜会を催し談話会を設け、懺悔を聞くなどの事皆行われた。勿論これは我が親ばかりではない。仏教の盛んなる地方にはあることであるが、父の遣り方は頗る真面目であった。それ故父は偽りの懺悔をしたり、道徳家ぶったり、殊勝らしくするのが大嫌いであって、飾りなき正直を好まれた。実意なき浮薄な人などは話をしたり同席するのも嫌われた。現に父が臨終の時も、その喜び様は平生もすこしも変らななだ。

ぼけ気味があったからにもよろうが、身体の苦と心の安心とは別になつていた。平素より特に念仏を多く唱えるという様なことはなかった。実に変らぬ、正直な、真面目な確かな点は自分の親ながら実に稀な人であった。悪いことを善くつくりようというようなことはすこしもなかった。悪かった事は悪い、仕方のないことは仕方がないという性質であった。「常観などもどつとせぬ」と言われたのは、この

点より眺められて、なお程遠いのを直言されたのであろうと、ひそかに愧ずる次第である。勿論深き学者でもなければ、高き徳者というでもないが、その性質を見聞していたために、私は親鸞聖人の人格、信仰、宗風などを幾分か理解することが出来る様になったように感じている。かく色々の点より感化を蒙ったけれど、直接に自己の信仰実験の告白に進むことにしよう。

しばしば言う通り、私が信仰らしきものを得たのは、明治三十年の苦悶時代である。その時の事実、心の有様などは「宗教的同朋」を初めとして、しばしば言ったから止めにして、その時、父が如何に心配してくれられたか。その時の病気が治ったのは、たしかに大もとは仏の慈悲に違いないが、この世では親の念力にて助かったに違いない。夏休暇中故郷にいて、日夜昏々としてふさぎこんでいたとき、父がどうかしてこれを治してやりたいと思つて大層心配してくれられた。もう一年で大学を卒業という間際まで漕ぎつけて、この有様は何たることである。命長ければ取多しということがあるが、自分もえらい死に恥をかいたことである。しつかりやれと戒めてもみたり、自分は余命もない身体であるから、代れるものなれば代つてやりたいと念じてくれた。

その苦悶の最後が、筋炎という病気になるって、長浜病院

心配させることになった。世間では善いと讃めてくれる人もあれば、悪いと非難するものもあったが、親の心では善も悪も超絶して、唯々法のためにその所信を貫徹させたいの一念より外はなかった。明治三十年から三十三年までは我が信仰を確立し、又信仰の力を実験した時代であったが、この世における唯一の生命は親であった。

三十三年航西の時、ほとんど生別の覚悟で別れたが、そのときに実に勇ましく、最も屈托のない顔をして「十分やつてこいサヨウナラ」と言われた時、初めて我が親はあれほど決心の潔い人であったかといふに驚いた次第であった。されど余の航西中は一寸の間も面白いことがなかった、と後で話された。

航西中の宗教的経験は経文を味わい、これを活かして行うということであった。その大体は「読経余瀝」に書いて置いた。こうなる源は父より授かった三部経の点本を西洋へ携帯したことであった。なお一層もとを思えば、全体親は経文が好きで、私が七才の時、自分が阿弥陀経を数行かいて、私にも数行書かせ、みな写さして下さった。これも昨年発見してそぞろに親の慈悲を感じた。又十二才の頃、特に大きい三経の点本を求めて、これを訓読することを教えて下さった。その時養つた習慣があらわれて、やがて西洋において経文を味わうようになった源である。

に入ることになった。その苦悶の有様は、信巻に御引用なされた涅槃経の阿闍世王の苦悶そのままであった。その時の両親の心配は一通りではなかった。切開をせねばならぬという時に、衆人がせめて大阪か名古屋で手術した方がよからうと言つたが、父は一点の躊躇もなく、断然直ちにこの病院で手術して下さい、幸にして本復出来るか、これで終いになるかは全く彼の運であると言つて決心が固かつた。それがため時期が後れずに大いに結果がよかつた。

この苦悶時代における内的経験は沢山あるが、後になれば親の慈愛さえも感ぜぬ石の様な有様に陥つたけれども、心の底には親という考えが潜んでいたものゆえ、軽々しいことは出来なかつた。その時の感じを書いたものがあるが、親のことを心配して書いている。又大経の第五悪段を讀んで、一言一句みな自分のことを書かれた氣持がして深く懺悔した。「父母教誨すれば目を瞋(いか)らし怒りこたう」と云い、「譬えば怨家の如し、子無きにしかず」などは、胸に針のさされる氣持がした。たしかに苦悶時代を泳ぎつけた唯一の生命は親であった。そしてこれを保つてくれたのは全く親の念力であった。かくして初めて仏陀の慈悲が心の中に生きて下さった。

それから二三年間は恰も苦悶の反動として、非常なる確信の上に打立って仕事をされる様になって、親にしては又も

全体、西洋の宗教事情を取調べた所で、宗教そのものが違ふ故、これを仏教改良の参考にするには、仏教それ自身の上において根底を見出さねばならぬ、而して経文はたしかに根底になったのである。かく西洋の視察をして、これを仏教の上に応用する生命は、又親より賜つた。経文は信仰経験の魂であるという考えから、釈尊の伝なども大いに味わうようになってきた。又他人より御覧になってはつまらぬ話なれど、私には大いに感激していることがある。遠慮なく打明けて話すが、たしか私が高等学校に居る時分であつたと思うが、一日父が弟に向つて、私に擊剣か柔術を習わしておきたい、他日洋行するようなことがあつた時、私の力が弱く身体が小さいから西洋人にあなどられてはならぬからと言われたとの事であつた。私が滞省した時、弟からこれを聞いて、さてはさては親だわけにも程がある、私には他の人と異つて洋行する機会のあるはずもなく、又すべき望もない、それにこの様なことを云われるのはおかしいことであると考へた事もあつた。久しくこのことを忘れて仕舞い、西洋に行きながら一度も思い出しもせなんだが、一昨年二月四日未明ベルリンの宿で床にいる時に、ふとそのことを思い出した。その感慨は実に甚だしいことであつた。思い回らせば十四五年前の事、勿論何も彼れ是れ云うべき程の事も無いが、時勢の変遷によって、親の云

われた通り、かく万里海外に居ることになっているかと思
えたら、親の慈悲やら、仏の御恵みやら胸に塞がって感涙
にむせび、とても横臥しているわけにゆかず、早速床から
出て、口を嗽ぎ、顔を洗い、満身の感謝をもって大経を訓
読し初めた。上巻半分程を読んで、夜が明けて学校に行く
べき時間になって出かけた。その日正午宿へ帰ったら、日
本から急用があるから帰れという電報が来ていた。何用か
分からぬが、この朝の所感が強かったために、道理理屈な
しに早速帰ることを決心して、直ちに立出した次第であ
る。三月二十四日長崎に着いたとき、何気なく電報を打っ
たら、故郷では父と母と電報をとり合いをして諸根悦予
(しょこんえつちよ)で身体中が嬉しいと云われた。それ
を聞いて我身ながらその不幸を自覚した。

婦朝以後今日まで、三年間は細々と伝道に従事している
次第であるが、この間には内心において色々の経験をし
た。極要点を言えば行(ぎょう)ということが分かる様
になった。五台山の仏陀波利、普陀落山の慧夢などの事に感
じて、即ち行によって仏の力を感得するということが分
ってきた。

そもそも前からの宗教的の経験をまとめてみれば、明治
三十年の苦悶時代より三十三年までは信仰の基礎を置いた
時代である。それより以後一生の間は、色々の方面により

ゆるみなく喜んでいたが、念仏ということとは十分わかって
おらなんだが、今ではこの大行の味がわかった。一三年來
の静観録を反覆してご覧下さい、畢竟この経験の外はな
い。これがため従来教条的むしろ教権的になってあった十
七、十八の両願の行信關係が實際的に明瞭になって来て、
随って従来こじつけの様にしか思われなんだ法然上人と親
鸞聖人との關係も、なる程かくあるべきはずと考えるよう
になった。かくて従来さほどにも思わなかった教行信証な
るものが、非常に意味深いものとなって、仏教の真髓を実
験する経過における必然の範疇(はんちゆう)であると思
えるようになり、従って、教行信証の御延書を非常に渴仰
することになった。このように私が自分一人で苦勞して仏
の力を経験したように思っていたが、私がこのようにいろ
いろ経験している間、故郷の親の様子をつくづく聞いてみ
ると、また全く同様に我がために念じて居てくれられたの
であった。魚が卵を孵化するのはその念力であると聞いて
いるが、親は息の切れる時まで徹頭徹尾、子を護念して下
さった。

さて、全体私は生來習慣であるか、これも親の養いであ
ろうか。仏が実在していられ、極楽が現存してあるという
觀念が深いので、七宝莊嚴の淨土が嬉しいのである。ある
時、清沢師が「善導さん風じゃ」と云って笑われたことを

経験を深めることを考えている。即ち西航中經文を味わ
うようになったのは、教行信証の中の真実教の味である。し
かるにその教えの真髓を簡潔にしてみれば、行になるので
ある。華嚴經は普賢行願品(ふげんぎょうがんぼん)に収
まり、法華經は安樂行品に収まり、觀音慈愛の徳は大悲心
陀羅尼に収まる。そしてこれ等の行は、それぞれの教えに
あらわれた仏菩薩の力を感得することが出来る。この諸仏
菩薩の中心たる弥陀仏の教えは、又南無阿彌陀仏の大行
(たいぎょう)の中に収まる。故にこの一行即ち諸善万行
の精隨である。即ち八念仏は無碍の一道であるVというこ
とがわかった。しかしその行(ぎょう)ということとは即ち
仏の力であることがわかった。して、かように道理づめに
悟ったのではない。人生實際の問題の上よりして、非常に
苦勞して、確かにその仏の力なるものを実験した。これ即
ち真実の行の意味となる。ここに初めて法然上人の念仏一
行を標榜されたわけもわかり、親鸞聖人がその仏の力を信
ずる信をもって受けられたわけもわかった。

三十年の時経験した信仰、即ち真実信の有様はこれがた
めに最も明瞭になって『歎異抄』第二章の「ただ念仏して
弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこう
むりて信ずるほかに別の子細なきなり云々」という意義は
ますます明瞭になった。今までは信仰ということとは一点の

記憶している。されど私が信仰を確立した時に、罪惡観ほ
かりで、無常観が伴わなんだ。筋炎の病の時なども一命が
危うかったのであったが、唯自己の罪惡のために苦しんだ
ので、阿闍世王の慚愧の心は十分あったが、未來墮獄の事
を考える余地がなかった。それで信仰を得た結果、平素仏
陀の慈光に接して喜んでいて、死んだら益々親しく如來に
接することに疑いはなかったが、平素常にそれを樂しむと
いう様にはなれなかった。これはたしかに罪惡観から入っ
て、無常観が著しくなかったからであると思っている。

『教行信証』の証の味が十分わからなんだ。

しかるにこの度は親が事實をもってこれを教えて下さっ
た。前にこのことは十分書いたから御承知下さったことと
信ずる。従来は信仰の方面を強く言うため、平生業成(へ
いせいごうじょう)、即得往生(そくとくおうじょう)の
意義は十分にわかったが、ややもすれば一益法門的になり
そうであった。「光明中の生活」とか「淨土の実現」など
と云ってはいるが、この人生の上では十分の所には達せら
れぬ。旧來の信者が極樂往生の觀念が主となって人生の事
を度外に置く弊(へい)を矯(た)めるために、青年の信
者は人生上の安心を強く言うのはよけれども、未來の觀念
にとほしい弊がある。私の如き生來七宝莊嚴の淨土を嬉し
がってありながら、なお適切でなかった。

然るに、この度父の示寂によってわかった。なる程親鸞聖人が、彼土得生の真実証を説破せられた意義が明らかに
なつて来た。宗教の極致は現世においては決して理想の極
に達することが出来ぬことがわかつて来た。八厭離穢土
(えんりえど) 欣求浄土(こんぐじょうど) √は宗教の極
であることがわかった。信仰の上よりは常行大悲の徳によ
つて、出来得る限り人のためにはかり、仏の御慈悲を伝え
たいとは考えているが、この世にいる間に為すだけ位は実
にいざさかの事である。真実の衆生済度などは思いもよら
ぬ。一旦浄土に入りたる後、再びこの世界に還来して、永
久の普賢の徳を行う境に達して理想的の衆生済度をさして
下さることが実に嬉しい。慈悲に聖道浄土の区別があつ
て、聖道の慈悲はこの世にて人をいとしがり、はぐくむこと
であるが、浄土門の慈悲は浄土に往生してから、六趣四生
いずれの業苦にあるところにも、自由自在に済度出来る
という還相廻向の意味が明らかになつて来た。我が父も今
ではこの境に入らせて貰つて、蘭林遊戯(おんりんゆう
げ)の功德を行い、我々の為すことを見て下さること、
何となく生みの親は永久の親となつて下さつたことを信じ
ている。かくの如く死後までも私に信仰の実験を与えて下
さつた大恩は忘れることは出来ぬ。

念 仏

——おもいでの記——

もう十年も昔(大正五年頃)のことになりました。秋の
陽の晴れた午後のことでした。

私は一人の親友とともにある若き母君のお伴をして、そ
の母君のいとげなき御児の御遺骨を火葬場からお迎えもう
してその御宅に帰つてきました。

御内仏のおそばに御遺骨を安んじ、香華をたむけたと
き涙が流れました。その母君と母君の御老母君とは殊には
げしくいつまでもいつまでもお泣きになりました。

その座には私共の他に一人の御僧(菅瀬芳英師)がおく
やみに来ておられました。その方は断えず御念仏を称えて
おられました。突然この御二人に向かつてこう申されま
した。

「泣くがいい、泣きたいだけ泣いていなさい。泣けばい
くらか悲しみのやり場もあるう、泣くより他に悲しみを
はらすこともできなからう。お泣き、心ゆくまでお泣き
なさい。けれどなあ、ひどいことを言うようだが、あな
た方の涙はじきかわいてしまう。もうじきに泣けなくな

が、これはまだまだ味わいたいと思うている。勿論以上書
いた真実信、及び真実の教行証の味も、もっと深く味わ
てから発表するつもりであったが、父が私の宗教的経験の
上に加えて下さつた念力の大きなを披瀝しようと思つて、
思ひ出し次第に書きました。思想がまとまっておらんので
読者諸君に向つては恐れ入る次第でございます。

「信仰余瀝の附録」 明治三十七年四月。

おかげさま まつもと ときお

おかげさまで今日一日を過ごさせていただいた。ふりか
えてみれば、みなおかげさまだ。今日あることも、昨日
あったことも、明日もまた、おかげさまで生かしていただ
くことだろう。

すぎ去つた長いあとをふりかえると、つらいこと、淋し
いこと、悲しいことも、いろいろあった。だがそれらのこ
とどもも、おかげさまで今日を生かさせていただくもとで
あったことを思えば、おのずから消え去つて、ただおかげ
さまと、手を合せるばかりだ。なむあみだぶつ。

白 井 成 允

つてしまふぞ。薄情だけれどな。それで、それを見抜い
ていて下さる親様の御涙はかわくときかないのだ、いつ
までも私達のために泣いて下さるのだ。だからその親様
の涙を想うてな、お念仏もうしなさいや。

せいせいお念仏もうすのだ。泣きたかつたらお念仏もう
す、泣けなくなつたらやはりお念仏もうす、お念仏もう
しなさいや。

そんなにしてお念仏もうすのは自力の念仏だからいけな
いなどと理屈を云うのじゃないぞ、自力の念仏だと云わ
れても何でもよろしい、ただお念仏もうさせてまいらせ
て下さる親様の御涙なのだから。そのままでお念仏もう
すのだ、それがいつの間にか他力のお念仏であると知ら
れてくるから。

お念仏もうしなさい、凡夫の涙はかないから親様の涙
に帰らせていただくばかりでな。南無阿弥陀仏々々」
御僧はこう云つてお念仏を高らかに称えておられました。

伝の中の山上の垂訓というところをくれば合わせてお話をしたりしたことあるの思つてみた。というのは、私が最初に心気転換をした直後である。その時、東京でたしか富士見町教会の副牧師をしておられた方が、私を尋ねてみえ、そして「自分は親鸞聖人の歎異抄なんかよく読んで、歎異抄のように信仰の世界をあれだけ短い文章で、ああいう風に立派にまとめているものはキリスト教の方面にもないと、そういう意味で歎異抄はすぐれているが、しかしながら、キリスト教の人としての自分としてはそこに物足らない、大事なことが一つある。それは歎異抄をいくら繰返して読んでも、なるほど、弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、と仏陀の救済ということは、はつきりするのだけれども、この信仰の眼が開かれたのち、人間として踏むべき道徳というものは、歎異抄のどこにも示されてないじゃないか。それだから、自分としては物足りなく思う」ということをいわれたのである。しかしその時の私はまだ気が若いし、それに対して何ともお答をしなかった。

その後、今ではもう故人になられた、大正時代の皇太子殿下の傅育官長をされていた三好愛吉先生という方、この方は仏教にも通じていられた方だったが、この先生を私がお訪ねしたことがある。ただ一度だったが、その時に、私は今の問題を持ち出してお尋ねしてみたのである。

であつて、それだから信仰の眼の開けた上は、こういうところが道徳上のつとめである。自分のつとめとしてやっぴかなければならぬ、そういう教えである。ところがあの山上の垂訓を読むというと、なんだかこう鞭打たれるような感じがする。例えば兄が弟に向つて、お前はかようかよくな悪いところがあると、改めなくてはいいかんではないか、悔い改めよ、といつてしきりに兄が弟を鞭打っている、こういう感じがする。私自身鞭打たれるような感じである。ところが、五悪段をしみじみ味わっていると、それは親が子供に対して、到底よくなりやうのない子供に対してお前はお前自身でも気がついていないだろが、かよふの悪いことがある、というよふなことを細かに懇ろにさとしてゐる。私はこの子の立場である。そういう感じがするのである。そこが、キリストの山上の垂訓と違ふところである。こういうことを感ずるようになった。

つまり親が涙ながらに到底よくなりやうもない子供に、かようかよう、お前の姿は、といいきかせているように感ずるのである。

道徳と宗教

それから、なお一層、五悪段のところ私が落着くやうになつた。それからさき述べたやうに、上の巻が少しわかり始めるといふと、なお一層そのことがはつきりしてきた

そうすると、三好先生は言下に「それが仏教の徹底したところである。仏教においては、一度仏のお救いが身に受けられた以上、その自分のなすこと、すべてこれは仏のなさしめたもうところである。今さら、こうせよ、あせよというよふなことで、道徳の教というものを別に書きあらわす必要はない。一体キリスト教というものは、不徹底な教である。だから、今からさきの日本国民の精神的使命の一つとして、仏教の徹底した立場から、あのキリスト教を徹底させて、その徹底したキリスト教を西洋に逆輸出するがよろしい。それが日本国民としての、仏教徒としての大事な使命である」というよふなことをお話になつた。若い時分の私だから、非常に感激して帰つたことがある。

しかし、その後、今の悲化段、五悪段をふかくこまかに拝読するよふになつてから、やっぱりここに大事な道徳の問題が秘められてゐるよふなことを感じた。かの山上の垂訓とこの五悪段とをくらべて考へて、人にも話をしたことがあつたが、そこを段々くらべてゐるうちに、なるほど両方同じ問題に觸れてあるところもあるけれども、しかしながらそこに根本の違いがあるよふなことに気がついた。

といふのは、このキリスト教といふものは、親鸞聖人のお言葉からいへば、他力の中の自分といふよふな教えなのである。

これは、近角先生にこつこつとをうけたまわつたことがある。「信仰の上から悪いことをしないよふになるといふのは、どんなことでありますか」と、こつこつとお尋ねをしたときに、先生は

「われわれとしては、凡夫として悪いことをしたくてしたくてたまらない、その悪いことをやりたくてたまらぬ自分をながめて、自分の姿を見とおして、なかなかこの悪いことがやめられない自分を、あくまでも同情しあわれみのところをもつてみてくださつて、そうして、そういうありさまであるから、どこまでも、おまえの心が溶けて改まつてくるまでは、どこまでもみすてることが出来ないよ、まことを注いでくださる仏さまの、その仏さまのまことを感ずれば、悪いことをやりたくてたまらない自分が、そつちへ溶かされて、自然とかわつてくる」

こつこつと先生は私におつしやつた。これが今なお身に沁み入つてゐるのである。

つまり五悪段の心持といふものは、こつこつとものである。自分の到底だめであるよふなところを、自分が自覚してゐないよふなところまで、自分に教へさとしてくださつて、しかもその大悲の涙は、私のためにそそがれてある、といふところに、この五悪段といふものがしつとりと心をうるお

すという、キリストの教えとまた異った趣きがある。むしろ徹底的な教えである。そうであるから三好先生のいわれたことも、そういうところから、うなずけるようになる。こういうことを思っているわけである。

そういう風であつて、だんだん六十歳となり、私には晩年のいろいろな苦しみが、今自分の身の廻りに集っているようなありさまだが、しかしながら、このみ教えに導かれてまいるのである。

続く

心光のあと

界 雄

昭和十七年六月一日

逝去の義弟山田収君の家を訪ふ

断腸のおもひするかも我が前に伏し泣きたまふ母の御すがた

生み育てし三人の男の児皆逝きて世はうつろなりと母泣きたまふ

身のもの皆焼きつくしいのちまで献げしきみが心たふとき

高原憲先生聞書

平岡 坦

水の味は水を戴く心

—— 価値観の顛倒 ——

前に述べましたことが人生の落し物につながる、つまり先ずは、自分の立っている足下をあらためて見直させていだいたのだと思います。然らば、吾々はこの落し物をどうして拾いあげることが出来るのか。それについて先生がどのように考えておられたのか。

「すべては恵まれてあるものである。自分の力で得た物は何一つ無い、水、空気、日光と、やすく手に入るものほど価値がある、高い金を払ってようやく手に入れたものだけが値打ちがあるように思っているのは大間違いである」とある日、家内が先生に申し上げたのでした。

「先生、庭に畑を作りました。漸く野菜が出来ていただけるようになりました」とすると、先生が「その野菜はだれが作ったのですか」「私が作りました」と云う家内の返事に、すかさず先生は「ホホ、貴女は野菜を作ることが出来るのですか」と。天の恵みを忘れていることに一本お面を

満洲の曠野のごとくうらさびしき心ならめと我妻おもふ満洲の曠野のごとくうら淋しき心を照らす久遠の御光

昭和十八年、京都に帰住す

中秋に臼杵祖山先生を中津に訪ふ

大陸に荒びしいのちそのままに我が師の御前に披きまつりぬ

あなたふとすさびしわれをそのままに撰取しませり我が師の君は

すさびたる此の身はつかし師の御前にたわけごとまでまをしまつりぬ

稲田わたる新稲のかほり身にしめて中秋の月ながめし宵はも

師の君は撰取の御姿そのままに我が煩惱をやわらげますも

広島に白井成允兄を訪ふ（九月十六日）

かたくなにむすびし氷わが胸に融くるうれしき久遠の御光

何となく涙せまりてわが友のしつけき家に一夜臥しけり

とられたのであります。そして「私は永年医者をしていますが、病人を治すことは出来ません。ただ治るお手伝いをしてにすぎません。医聖ヒポクラテスが云ったように、病氣は天が治し、お礼は医者がもらう。勿体ないことです」と先生は結ばれました。さらにまた

「一切の物事は逆に考えればよい。一切が雑音である。雑音をきくな、雑音であることに注意せよ。昔ラジオが漸く聞かれる様になった頃、大正天皇御大葬の放送がありました。機械が不完全でディーガーガー雑音が多い。その雑音の中にきこえるアナウンサーの声を一生懸命に耳をかたむけて聞いたものです。雑音に耳をかたむけず、雑音を通して真意がどこにあるかをつかめ。九十八パーセントは無駄なことである。ただ一パーセントだけ大事なことがあるが、それに気付かないでおる」と仰言つてたしなめて下さいました。

「表には裏がある、裏を見よ。喜びの裏に悲しみが芽生えているのだ」と有頂天をたしなめられて、「悲しみの裏に

喜びが与えられている、悲しみに心をまどわすことはない。さらに、順調のとき程危険であることを知らなければいけない。右がよさそうだから右に、左がもうかりそうだから左へ行こうとするのは、右往左往チンチロ舞の一生です。要するに、価値観の顛倒、何が大事であるのか、これが全然逆になっている」と云われました。

大恩は謝せず

吾々は人の智慧ならざる仏の智慧に抱きかかえられていることに気付かされて、いみじくも先生は仰言りました。「大恩は謝せず、という古語がある、これは感謝しなくてよいと云うのではない。吾々は思わぬ御恩を受けているのである。その御恩はあまりにも大きいのです。それに気付かずにいるのです。そして御礼を申し上げるようなことで相済むようなことではないのである。夜道に行くのに手にした提灯に、提灯のおかげでと御礼は云っても照らす月には誰も礼を云わないのです。いや私は云わないのです」

と、このように話して下さいました。私も、先生の数々のこうした御手廻しの中に、しみじみと、この大恩は謝せずの心境を教えられました。

念仏詩抄

誓いたり

——Kさんへ——

ありがたかったら
称えましよう
ありがとなくても
称えましよう
称我名字の
願建てし
ナムアミダブツさま
およろこび——

称えるみ名の

おん仰せ

若不生者と誓いたり

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

人生の最終目標は方向を戴くことである

(願船乗托)

豪華船と泥舟の如何は問わない。豪華船とは才智たけたる秀才、泥舟とは私のような愚鈍の者、わけの判らない者を云うのであって、それはどうでもよいことである、因縁だ。しかし如何に豪華船たりとも羅針盤がなかったら何処に行くか判らない、ただの漂泊船ではないか。

人生を船の航海にたとえるならば、いよいよ船出して、あの港にぎやかでよさそうだが、こちらの港が楽しそうだと、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりで、これでは漂泊船にすぎない。迷いの多い航海ながらた目的の港めざしてまっしぐらに進む。泥舟たりとも結構わたって行けるのである。要は羅針盤を持っているか否かということが、この難度海を渡るに大事なことであります。

あともどりあともどりしてたどるらん

甲斐なきことに心迷いて

私が求めに求めた、本当の吾が友、真実なるものはこれであったことを知らされました。

尚、またこう仰言いました。

二兎を追うものは一兎をも得ず、つまり片足を船にのせ一方の足は陸に止めていては船には乗れない、それでは羅針盤はいただけない。

唯仏是真の願船におまかせしよう。

木村無相

バカは

むかしの人が
こう言った
バカは死ななきや
なおらない
ほんのう具足の
このわたし
死ななきや仏にや
なればせぬ

仏くさいこと

言うじゃない

バカは死ななきや
なおらない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

つきづめ

称える人にも

称えぬ人にも

如来さまは

つきづめ――

信の人にも

不信の人にも

如来さまは

つきづめ――

だれでもかれでも

いつでもどこでも

如来さまは

つきづめ――

つきづめ

つきづめ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

そのまま

そのままと

仰せらるるに

そのままに

なろうとかかり

ひとり苦しむ

そのまま

そのまま

そのまま

そのまま

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わたしの安心

わたしの安心

ナムアミダブツ

六字のほかに

ナニもなし

ナムアミダブツの

仏勅を

ナムアミダブツと

聞くばかり

もらうだけ

//まいろ まいろと

わしゃ 気をもんだ

南無の二文字を

知らなんだ

南無の二文字の

オイワレ聞けば

信心苦にする

ことはない

南無の信心

如来の御廻向

ナムアミダブツと

もらうだけ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仰せ一つ

ナムアミダブツに

どう聞いた

//汝を救う//と

こう聞いた

//汝を救う//の

この仰せ

仰せ一つの

ほかはない

ナムアミダブツの

ほかはない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

忘れ得ぬ人々

花田正夫

行きずりにふとお会いして、そのまま別れてしまった人であるが、その時に目にふれ、耳に聞いたことが何時までも心にきざまれて忘れ得ぬ人々がある。元来私共は、他人から支配せられることを嫌う性質があつて、若しそうした人の言動に触れるとすぐ反撥するが、何の気なしに語られることがすうと心に刻みこまれて永く印象づけられることがある。本当の感化というものはそうした心と心の自由な交流による、所謂無意識下の影響が大切と思う。

K先生の述懐

大分以前のことであるが、永年師範学校で地歴の教師をして定年退職されたK先生が、

「私が退職と聞いて、沢山の人々が謝恩会を催してくれ、一人一人が私の思出を語ってくれました。ところが、私は地歴が専門で、その方面の勉強は懸命にやり、力一杯教えた積りですが、そのことについては何一つ思ひ出話が出ませんでした。

唯不用意に言ったこと、行ったことの断片が皆の心に

て質問した。そこでとにかく講話を聞きなさい、半日の日当を出すからということで、共に法筵に列なつた。

その後、そのまま忘れていたが、何かの用事で富田の町に行つた時、一人の清掃車を引いた人が走り寄つて来た。よく見るとかつての車夫の人であつた。

「私は時勢の流れで自動車が増え車夫もあがつたりになり、町のお世話で清掃人夫になつて細々と暮しております。毎日塵埃の掃除をしていますと、ことに夏分になると、腐敗したものも多く、それを集めながら汗だくになります。それがそれにつけても仏様は一切の人々の罪障を浄化して下さるとお聞きしますにつけ、その御苦勞は大変なことだと知らされお念仏させて頂いています。

そして貧しい私は、風呂にも入らないでそのまま夕方の勤行をいたしますが、こんな穢い身体で申しわけありませんと仏様に申し上げますと、だいたいく〜と仰言つて下さいます、ありがたいことです、南無々々」

と、懐しげな笑みを浮かべながら語つてくれた。其後も別れたきりになつてゐるが、何時までも私の心に残る人で、富田の町を本当に浄化して、明るい灯火を掲げている人はこの人であると知らされ、私の心中にもその人の存在が一点の灯火となつて輝いてゐる。

残つてゐるのに驚きました。或者は、雨でドロソコになつた路で下駄の鼻緒を切つて困つていた時、先生がポケットから緒を出して下さつたことが忘れられないと云い、或者は、先生が出欠をとる時小首を一寸かたむける癖があつたが、自分が生徒の出欠をとる時、フトそれを思い出して苦笑します、といった風なことばかりでした。

そこで私の数十年來の教育が大間違ひしていたことに気づきました。不用意の中の言動が一番大切なのに、それには全く無反省で他の方面ばかりに努力して徒勞を続けました。不用意の中の言動は、私自身の身についたものが自然に出るので、その私自身を養うことをおこたつていまして、全く申しわけないことでした」

或清掃人の思出

私が京都で学んでいた頃、横田慶哉師のお伴をして撰津富田に行つた時、一人の車夫の人がしきりに御法義につい

T看守長の喜び

或年、奈良の浄教寺の法筵に遭つた時、T看守長が満面笑みを浮かべて、刑務所の中に念仏の花が咲きました、という前置きで次の様な感話をしてくれました。

「先日、或看守が、屋食をはこんで独房の囚人に与える時、こんな水臭い味噌汁が食べられるか、といつて突き返しました、看守長どうでしょうか、と聞きますのでそのお汁を一寸味をみると成程すこし水臭いのでそれを加減して、今度は私が直接運んでやりました。

ところが、その囚人が、こんなものが食べられるか、と云つていきなりお椀を私に投げつけました。夏のこととて白い官服を着ていましたが、お汁で穢れてしまいました。その囚人が私に投げつけた時、切角味までよくして持つてきたのに、思わず心のごぶしがあがりましてカッといはしました。その刹那にどうしたことかナムアミダブツとお念仏が出ました。すると不思議なことに、この囚人はこうして人の親切をはね返しているが、私は永年の間、仏の御慈悲をこぼみ続け、はねかえして来ましたがが知らされ、ふりあげた心のごぶしが自然にさがり、何も云えなくなつて、早速官舎に帰つて服を着換えました。

その日の午后、私が見廻りをしておりますと、後ろから

看守長、看守長と呼びますので、そちらを見ると、問題の囚人でした。何か用事か、と聞くと、さきほどひどいことをしたので叱られるのを覚悟していましたが、看守長は何も仰言らずに平然と巡廻していられたので、びっくりしました。こんなことは何か道を得た人でないと出来ないことです、何か尊い教えを得ていられるのでしょうか、と云いました。

私はそこでありのままに、実は自分も腹が立った、ひどい奴じゃと思った。その下から自分が仏様のお慈悲をはねかえしてばかりいたことを君によって見せつけられていることに気づかされて、愧ずかしくなり、怒れなくなつたのだ、と云うと、そのところをもっと詳しく話して下さい、と云いますから、それは専門家の教誨師さんが居られるから、その方から聞き給え、と云うと、いや貴方からお聞きしたいと云いますので、その後は昼の休み時間には、独房をたずねて話し合っていました。宿縁といましようか、その囚人が念仏申すようになってくれました。……」

と、さも嬉しそうに話して、共に念仏しながらお茶を喫しました。しばらくして、

「それから数日して、その独房をたずねますと、一通の手紙を何度もく押し頂きながら、持ち換え、持ち換え

Tさんは私同様に真言宗の家に生れたのでしたが、今度仏壇を新しく迎えるについて、自分の喜びから、子々孫々に、この念仏の道を伝えのこしたい一念から、思いきって真宗に転宗し、せめてもその御縁になれかしと願っていました。無邪気な法悦が身体中からこぼれおちるような面影が私の心のこり、忘れ得ぬ人となっている。

耳にのこる尺八の音

私が京都の学生の頃、寒風のきびしい歳末、とある駅に走せつけた。すこし発車するまでに時間があつたので、構内のストープに数人の客と共に手をさしのべて温まっていた。

そこにみすぼらしい風体の足の不自由な人が駅に入ってきたが、他の客に遠慮して、駅の片隅のベンチに腰をおろし、大きな風呂敷包みをあけて一本の尺八を取り出し、それを押し戴くようにして、ゆっくり奏しはじめた。その音曲が構内を快くゆるがせて流れはじめると、歳末の忙しきで、トゲトゲしくなつた人々の顔が次第にやわらいでみんながその曲に聞き入っていた。私は性来の音痴でサッパリわからないが、わからないままに心が洗われる思いがしてきた。しばらくして曲が終つたので眼を開けてその人を見ると、尺八を戴いて包みの中に入ってしまった。その人は家々の門に立って尺八を奏し、若干の銭を貰って歩く人、不自由

して念仏しておりますので、どうしたんだ、と聞くと、これは御覧の通り母からの手紙です、釘折れのような字で、今迄は、読みもせずに反古の中に捨てておりました。何時も同じことの繰返しで、身体を大切に、真面目につとめて、早く釈放されるように、村の人がどう云おうと、出所したらまっ直ぐに家に帰れ、布団も着物もとのえて待っているから、といったことだけですから、読まなくてもわかつているのです。ところが念仏申されるようになってから、どうしたことかこの母が恋しくなつて、会いたくて仕方がないのです。かと云つて遠いところから貧しく無智な母に面会に来て貰うことも出来ず、手紙も書いたことがない母が、一生懸命に書き綴つた手紙を受けるにつけては、こうしてしばらく持ち換え持ち換えていると母に会えた心地になつて嬉しいのです、としみじみ話つてくれました。

その時、負けた！自分は親からの手紙を一度でも押し切りたいことがあるかと省みさせられ、有り難いやら恥ずかしいやらで、念仏のお引き立てをうけました。

又、度々私とその囚人と話し合っているのを隣りの囚人が耳に入れてくれ、私にも聞かして下さいと云うようになり、刑務所内に念仏の花が咲き始めました、「云々」と話してくれました。

の身体で働き口もなくてそうしたこと糊口をしのいでいる人であった。浮くも沈むもその尺八一本にかかっているようであった。けれども押し戴いて奏する音曲は、四圍の人々の心を明るく引き立てていった。そして奏者自身にもその曲を聞き入って楽しそうであった。

私はそこに、この一人の旅人は、その行く所々を明るくし、自分もそれで救われ、恵まれてる姿に感動し、冬になると自然に思い出される忘れ得ぬ人となった。

糸瓜（へちま）の花

終戦後、衣に食に住に人々が右往左往して、日本人全体が歌を忘れていた頃である。私も無理がたたつて、心筋障害による狭心症の発作を繰返していた頃、大病院で一応の手当をうけて退院出来た。その時「ひびの入った茶碗も大切にすれば長持ちするから、無理をしないように」という警告をうけ、他のつとめをすっかりやめて家で過ごすことにした。

さて、これからどんな生活したらよいかと、とつおいつ考え続けていた頃である。当時空襲で焼け残つた三軒長屋に住んでいたので陽もあたらぬ始末で、家内は何か内職を見つけないと走り廻っていた。その時、フトせまい裏庭に一本の糸瓜がヒョロヒョロと延びて、便所の屋根に逼りあがっていた。そして黄色い花をつけていた。花より団子の時

代ではあったが、そのひなびた花の美しさに見惚れていると、何処からともなしに一匹の蝶が花に来てしきりに蜜を吸ひはじめた。それを見た刹那、良寛さんの詩、

花心無くして蝶を招き
蝶心無くして花を尋ぬ

花開く時、蝶来り

蝶来る時、花開く

吾亦人を知らず

人亦我を知らず

知らずして帝（みかど）の則に従う

が心に浮かびその糸瓜の花を拝みながら大いに納得させられたことは、花が開くと無心に蝶が来て、そのおかげで花粉が媒介させられ、蝶は花の持つ蜜で養われる、もし蝶が来なければ実は結ばれず、もし蜜が無ければ蝶の食べ物はない、自然の大調和の世界の妙を知らされると共に、私の生き方も、一日一日を大切にお念仏の花を頂いていくばかりであると心が定まった。その時の腰折

生かされて生くばかりなりみ仏の

ふかきちかひのあるにまかせて

と日記に書き誌した。

すると、当時宗教書が出版されないし、聞くにも食糧難、交通難が続く始末で、法を求めても得られぬ切ない訴

いたずら半分文鳥の前に鏡をおくと、鏡にうつる自分の姿に挑戦をはじめた。そこで何とかしてそれはお前の姿だと知らせたいと思っても、言葉の通じない悲しさ、何度試みても同じように自分の影に挑戦した。

当時ある雑誌に、鮎の棲む川に鏡を入れると、鮎は自分の影を侵しにきた敵と思ひこんで、その鏡にうつる自分の影に猛烈な攻撃をはじめたことが紹介してあったので文鳥のことも思い併わせて深く感じた。

それと共に、自分の姿は自分で知ることが出来ない。それは山に居ては山が見えず、山から出て山の全体が知れるように、自分をはなれてはじめて自分を知ることが出来るだろうけれど、自分の力で自分を越えることは至難である。そこで、自分以外の観点から自分を見て貰わねばならぬ。しかもそれは曇りとひずみのない鏡でないとししくうつらぬから、完全な人から見て貰わねばならぬ。

儒教では十指のゆびさすところというけれど、人が見たものは矢張り不完全であるから、智慧と慈悲の円満された仏智の鏡による以外に自分の正体を知る道はない。けれど悲しいことには、仏陀がかねて私共の正体を知り尽くされて、例えば大無量寿経では悲化段五悪段に煩惱具足の凡夫の私共の正体を徹に入り細にわたって説いて下さっていても、こうした悪人も愚人もいるわいと、他人事になって自分のことと気付けない、それは文鳥や鮎が鏡にうつる自分の姿を自分のそれと気付けないと同様である。

えにうながされて、せめてその谷間をすこしでも埋められたらと願って、その前年から小冊子『慈光』を月々出版していたので、これあるかな／＼と押し戴いた。自身が旅に出られなくても冊子は郵便屋さんのお蔭で国中はもとより、世界の何処にでもとどけられる。病身とは云え、読書や原稿書きは出来る、この冊子に仏語をいただきながら、いのちのかぎり刊行し続けようと生活目標が出来た。

それと同時に、文字のあることのありがたさに驚かされた。丈夫で何処へでも出掛けられる頃は、用事を手紙に書いても、取りあえず一筆までいずれお目にかかりましてという風に、言葉を軽く見ていたが、さて我身を省みる時、このいのちは風前の灯火であるが、言葉はいつまでも残る、身体の活動には限りがあるが、手紙は何処まででもはこばれて行く、言葉のもついのちの長さ、そしてその活動のひろさに思いあたった時、思わず私は文字を押し戴かずに居られなくなった。このことは病気を縁として教えられたことで、病は大恩人なりと云った篤信者の心の一端にふれることが出来た。

糸瓜の花は人ではないが、私には忘れ得ぬ人のように大きな教えを恵んでくれたありがたい花であった。

鏡にうつる自分に驚く文鳥

私はかつて手乗り文鳥を飼った。段々大きくなった日、

私は一匹の手乗り文鳥から、自分の愚鈍さを教えられて、万物の霊長などと威張っている自分がめらめらと崩れる思いがした。それから文鳥も忘れ得ぬもの一つに加えられた。

行きずりの老人の言葉

私が三十五歳の頃、肺浸潤で二年ばかり静養した時、大分恢復したので八事の山を散歩していた。そこへ一人の老人が現れて、私の身体をしげしげと眺め

「あなたは立派な身体を親から貰ったね。この身体を大切にしてくくと、倉の五つや六つは建てる事が出来る。切角立派な身体を貰っていても自分で損ねて駄目にしてしまうのだが、大切におしよ」と、告げてサッサと消えて行った。この人も忘れ得ぬ一人である。

国木田独歩の武蔵野の中に「親とか子とか又は朋友知己、そのほか世話になった教師や先輩などは忘れてはならぬ人と云わねばならない、然し、ほんの赤の他人であって、本来をいうと忘れて了ったところで人情をも義理をも欠かないで、しかもいつまでも忘れて了うことの出来ない人がある、それが、僕にある」と云って、そうした人々を拾いあげて書いた一文がある。妙に私はこの思いつきに心ひかれて、一度私もそうした人や物について書いて見ようと思つて、駄文を草して年頭の御挨拶にかえた、御諒承を乞う。

あとがき

歳旦にますおとすれし念仏かな
白道に手をつなぎたる三日かな

念仏をあるじとせばや三ヶ日

歳旦池山先生の法味を誦しつつ年賀にか
えさせて頂きます。

歳月がどんなに流れても時代の垢がつかず、日々にあらたな生きたまこと。どんな人によつても濁らされず、かえつて人々の濁りを浄化して下さるまことのいのち。讃えまつる言葉もない、唯御名を称えまつるばかりであります。このおまことにわれひとともにおどめられて、時と所をこえて交らぬ、心と心の交流する俱会一処の浄土の余光を、この世にあつて信味させていただけけることは、何というよろこびでありましようか。

限りある人と人との交りのはかなさ、流れに浮かぶ泡沫であります。み仏のおまことに結ばれる時、無数の人々と、無限の時にわたつて消えない友誼をいただけるとは、独生独死、独去独来をさだめとした人生が賑やかで明るい浄土の旅と転じるのであります。

近角先生の「予が宗教的実験」は先生の信の歩みの根幹を表白して下さつたものであります。年頭このお示しによつて私共の道を明らかにさせて頂きました。

白井先生が菅瀬芳英師の一語によつて、

御自身の生涯の目的を「唯弥陀の本願を聴く」一つに見出された尊い記録であります

福島先生はお身体がお弱りのため御執筆も御無理との御由で、旧著、「読書と教養」の序説から頂きました。ひとえに御平安を祈念申しております。

平岡様の高原先生聞書は実生活の上に仏語をお味い下さつた、平易の言葉の中に含蓄の深いものであります。紙がないと画も書もかけませぬ、生活を離れて聞くと概念の蜘蛛の巣にひつかかつて難渋し空転しがちであります。

木村さんは御無事に御越年とのこと、念仏詩も出来、新らしく送って下さいました。私と同じ年で、同じ老病の身、互にはげましの言葉を交しつゝ、信の旅を共に迎らせて貰つております。

絶対他力と体験と信を行く旅人は品切との由であります。

〈御案内〉

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜
午後一時半。南区駈上町二の八八、
一道会館

市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、
新瑞橋終点下車

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後
昭和区小桜町二丁目四番地
市バス、北山町。又ハ御器所通り下車。

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野 穂 志 郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈 光 社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七